Japanese association of educational psychology

成人期・中年期における“主観的老いの経験”の検討

若本　純子
（お茶の水女子大学大学院　人間文化研究科）

【問題・目的】中年期において自覚される老いの経験は、心理的様相や行動を規定し、老年期よりもその影響が大きいと指摘されている（Whitbourne, 2001）。しかし、それらを検討した実証研究はほとんど見られない。そこで本研究では、従来老年期的テーマとされてきた“老い”を、成人期・中年期男女を対象に、日常的場面から多面的に収集し、尺度を構成することを目的とする。

【方法】1.予備面接：＜目的＞生物学的、社会的影響（長寿化、社会・経済状況の悪化）を受けやすいと考えられる主観的老いの経験を、成人自身へのインタビューによって抽出する。＜対象者＞30～50 代男女 9 名。＜時期＞2001 年 4～5 月。＜内容＞「年を取った」「もう若くない」と感じるエピソードや場面、自己の側面。＜結果＞51 項目収集。KJ 法により集約し 26 項目で尺度構成。2.質問紙調査：＜調査時期＞2001 年 6～9 月。＜対象者＞30～65 歳男女。＜内容＞上記 26 項目について、「ここ数ヶ月、どの程度感じるか」5 段階評定。＜手続＞個別に郵送、手渡しにて依頼。回収数 1023（配布 1800；回収率 56.8%；内訳：男 373 名、女 639 名）のうち、1012 名分を分析対象とした［年齢 M(SD):45.66(9.32)］。

【結果】まず探索的因子分析（プロマックス回転）を実施したところ、以下の 3 因子が得られた（表 1）。

表 1　主観的老いの経験探索的因子分析結果（プロマックス回転）

	F1	F2	F3
17 記憶力、理解力が低下した	.753	.103	-.220
13 集中力、気力が低下した	.748	.065	-.122
8 疲れやすくなった	.718	-.144	.103
5 運動能力が低下した	.654	-.184	.181
18 若い人とのずれを感じるようになった	.598	.067	-.032
24 肩こりや腰痛がひどくなった	.590	-.095	.108
16 今の流行にうとくなった	.511	-.079	-.008
21 風邪や二日酔いが治りにくくなった	.508	-.060	.100
10 性的能力、魅力が低下した	.501	.211	.014
22 体型が変わった	.442	.024	.159
15 容貌が変わった	.385	.317	.090
3 目、耳などが悪くなった	.355	.276	.032
12 子どもが成長した／親が老いた	.317	.304	-.028
19 楽に生きられるようになった	-.144	.710	-.037
14 経済的に余裕ができた	-.128	.623	.007
9 旅行や趣味に使う時間が増えた	-.038	.616	-.040
11 人間として円熟した	-.190	.553	.300
7 自分や夫の定年後について考えるようになっ	.278	.456	-.005
23 同年代の人々が年を取った	.307	.450	-.036
20 自分の死が身近になった	.230	.427	-.028
26 健康への関心が増した	.271	.326	.205
2 仕事に対する考え方や取り組みが変わった	-.051	-.050	.752
1 食事・酒の量や好みが変わった	.066	-.155	.655
4 自分らしさについて考えるようになった	.006	.258	.539
6 テレビ番組や服装の好みが変わった	.127	.114	.528
25 社会的立場が変わった	.068	.100	.509
因子寄与	5.47	3.90	3.15
因子間相関	-		
	.32	-	
	.31	.30	-

この結果をもとに、各因子の持つ意味内容を重視する因子モデルを構成するために、確認的因子分析を実施した。モデルの設定に当たっては、探索的因子分析で抽出された 3 因子を採用し、因子の意味内容が最も活きるよう項目を再構成した。第 1 因子は心理的機能・身体機能の低下を意味する項目によって、第 2 因子には退職や人生の終結といったテーマに関連する現象、および老いの一側面として感じられる肯定的変化を意味する項目によって、第3因子は他者との関係の中で感じられる変化を意味する項目によって構成した。基本モデルでは十分な適合度を得られなかったため、有意味な解釈が可能な誤差間に共変動を付加した修正モデルを作成したところ、十分な適合度が得られた（表 2）。

表 2　主観的老いの経験確認的因子分析　適合度

	GFI	AGFI	RMSEA	AIC
基本モデル	.87	.84	.06	1754.73
修正モデル	.90	.88	.05	1361.06

以上の結果から、心理的機能や身体機能の低下を示す第 1 因子は「身体的下方変化」、人生の終結に関連する現象と老いに伴う肯定的変化を示す第 2 因子は「人生の終結に向かう変化」、社会的場面における行動や意味づけの変化を示す第 3 因子は「社会的志向の変化」と命名、同定した。また各因子について α 係数を算出したところ、いずれも α ≧.70 であった。確認的因子分析結果、因子名、影響指標値を表 3 に示す。

表 3　主観的老いの経験　確認的因子分析結果

		因子名	α
13 集中力、気力が低下した	.70		
8 疲れやすくなった	.68		
17 記憶力、理解力が低下した	.65		
5 運動能力が低下した	.61	身体的	
10 性的能力、魅力が低下した	.57	下方変化	.83
24 肩こりや腰痛がひどくなった	.54		
15 容貌が変わった	.52		
21 風邪や二日酔いが治りにくくなった	.47		
22 体型が変わった	.46		
7 自分や夫の定年後について考えるようになった	.61		
26 健康への関心が増した	.59		
3 目、耳などが悪くなった	.50		
20 自分の死が身近になった	.49	人生の終結	
11 人間として円熟した	.45	に向かう変化	.70
9 旅行や趣味に使う時間が増えた	.40		
14 経済的に余裕ができた	.38		
19 楽に生きられるようになった	.36		
23 同年代の人々が年を取った	.53		
18 若い人とのずれを感じるようになった	.50		
4 自分らしさについて考えるようになった	.47		
12 子どもが成長した／親が老いた	.45	社会的志向	
25 社会的立場が変わった	.45	の変化	.70
6 テレビ番組や服装の好みが変わった	.44		
16 今の流行にうとくなった	.32		
2 仕事に対する考え方や取り組みが変わった	.31		
1 食事・酒の量や好みが変わった	.27		

NII-Electronic Library Service